

2016年訪中団（西安）の現地報告例会

「一帯一路」構想の中心都市・西安の今を観る

日 時：2016年10月14日（金） 大阪産業創造館

今回の例会は、9月に実施された訪中団に初めて参加したメンバー4名【(株)旭渡金工業所 小林晃氏、坂本造機(株) 坂本進氏、(税)ガルベラ・パートナーズ 相原進矢氏、赤木法律事務所 赤木真也氏】による訪中報告です。中国政府の「一帯一路」政策の中心地といわれる西安の「今」を4人の経営者の視点から率直に語っていただきました。



報告者（左より）小林氏、坂本氏、相原氏、赤木氏

■ 小林 晃氏

日系の大手企業である西安大金床安縮機有限公司（以下：ダイキン社）と兄弟機機有限公司（以下：ブラザー社）を見せていただいたのですが、どちらも日本の工場とほとんど変わらない様子で、品質管理、改善、社員教育の徹底ぶりに驚きました。こうして中国と日本国内の技術力にはもうほとんど差がなくなっているだけに、これからの日本企業は自社の特徴を活かした経営をしていかなければいけないと強く感じました。

■ 坂本 進氏

内陸部にもかかわらず日本的経営で成功させていることに感心しました。品質管理も全数検査はしているものの、不良率はそれほど悪くないということでした。ただ、中国経済の落ち込みの影響は少なからずあるのではないかと。またかつての世界の工場も今は賃金の高騰やさまざまな問題を抱え、そう簡単には「一帯一路」政策が成功する環境にないのではないかと感じました。とはいえ中国はまだ日本とは関係の深い国、なんとかいい関係を保ちともに発展できる関係でありたいですね。

■ 相原 進矢氏

開発区にある大手2社は、品質管理はもちろんのこと、環境や安全性そして社員教育などの面においても進んでいるなという印象を持ちました。私にとっては、現地の中小企業でもあるソフトウェアの開発を行っているベンチャー企業、馬晋軟

件有限公司（マップ・エンジニアリング社）にとっても親近感がわきました。現地の人たちがどれほど給料をもらっているかなどリアルな話題も正直にお話しいただき、とても参考になりました。

■ 赤木 真也氏

習っている中国語がどれほど通じるか試してみるつもりもあって今回の参加を決めました。レストラン、屋台、街の人などさまざまな人と話をしました。西安外国語大学の日本語を学ぶ学生たちとの交流も大変有意義でした。これら現地の方々との話を通じてわかってきたことは、賃金は上がってはいるものの、それ以上に物価の上昇のスピードのほうが速く、生活はそれほど豊かにはなっていないこと。「一帯一路」政策がすすめられているものの、人々の眼はまだまだ沿岸部の豊かな地域に向けられ、人の流れもそちらへ向かっているということ、中国は大学を卒業してもなかなかいい就職先がないということなどさまざまなことが見えてきました。政府の政策の恩恵が末端にまでいきわたるにはまだまだ時間がかかるのではないかと感じた次第です。

■ まとめ

5~6年前の中国の様子とは少し変わってきている感がありますが、参加者からの質問や懇親会での他の参加者の意見などからは、市場としての期待や、サービス業などまだまだ関心のある方は多いようです。今後も広い視野で中国を観察していきたいと思えます。

会員募集しております

日中経済交流研究会では、毎年訪中団を派遣し、「今」の中国を観ることを大切に企業見学や人の交流活動をしています。自分の目で生の中国を見ることは、国内でビジネスをする上においてもとても有意義です。ぜひ我々とともに学びましょう。（詳しくは事務局・泉谷まで）